研究

木浦鉱山の歴史

酒井　博

（会員　津久見市上青江）

村落名としての木浦鉱山は大分県南海部郡宇目町にあり、傾山（一六〇二㍍）の東側山麓に位置し、九州でも最も山奥深い村落のひとつである。四〇〇年又はそれ以上の古い鉱山の歴史を持ちながらいまだにエメリーという鉱物を採掘している。日本でも恐らくは最長不倒の鉱山ではないかと思う。しかし篠本二郎氏「地学雑誌第七集、豊後鉱物採集案内」（明治二八年）が「木浦鉱山は、鉱物学的にはその豊かな種類のため大変貴重な存在であるが、その豊かさのためかえって将来採鉱の望みを託せる物がない」と記しているように、その特徴のために栄枯盛衰を繰り返したのである。ここで木浦鉱山の歴史を辿って見る。

木浦鉱山の起源については諸説があるが、いずれにしても江戸時代以前に発見されたことは間違いない。鉱山考古学という新しい分野から言えば、木浦鉱山は古代から金・銀・銅・鉛・亜鉛の五種類の金属を生産したと推定される。

炭焼き小五郎、またの名を真名野長者の伝説は、古くから豊後国大野郡三重地方に流布していたもので平成一〇年、その基ともいうべき真名野長者伝記纂集の「真野の長者一代観音記」なるものが芦刈政治氏等によって解読出版された。この伝説は中世以降物語化され舞の詞章となり、近世では浄瑠璃台本となり、更に空想が加えられて実録物となったという。その中で炭焼き小五郎が湧き出る砂金を見つけたこと、唐の密教の本山に三万両の黄金を寄付し、謝礼として蓮城法師が仏像をもって内山に尋ねてきたこと、伊豫に商用で出掛けて時化に会い遭難しかけたところを助けられ、そのお礼に一夜にして御堂を建てたというような大盤振る舞いは並の財力ではできないことだと思われる。内山観音には真名野長者（炭焼き小五郎）夫妻の墓と伝えられる二基の見事な宝塔がある。更に臼杵市深田の臼杵石仏も真名野長者の建立と

の伝説があり、同夫妻の石像がある。往昔民間人が一時に財力を蓄えるということは余程の豪商か、さもなくば鉱山のヒット以外には考えにくい。真名野長者発生の内山地区は祖母傾山に近く、或いは木浦鉱山や尾平鉱山がその候補地として考えられるのではないかと言われるのも一理ある。国際資源大学校講師の植田晃一氏は木浦鉱山が奈良時代にも錫を産出していたという仮説を打ち出している。即ち鉱山の開発が古文書として記録される以前のことである。また古代史学者西郷信綱著『古代人の死』によると、豊後国の住人緒方三郎惟義(惟栄)の五代前の先祖の出生の由来について記している。即ち「平家物語巻八」からの引用として「豊後国の片山里に住む女のもとに夜な夜な男が通いただならぬ身となった。親が怪しんで狩衣の頚上に針をさし、シズのオダマキをつけておくとウバ岳の麓の岩穴に入った。声をかけると一四丈もある大蛇が出てきた。この女と大蛇の間に生まれた男児がアカガリ大太と呼ばれる豪の者になった、緒方三郎はかかる怖ろしき者の五代の孫にあたる」というのである。

ここで大神緒方の系図を見ると緒方三郎の五代前は大神惟基になる。大神古文書(胡麻鶴氏系図)によると、大神惟基の子惟衡から惟茂―惟隆(臼杵氏の祖)三代が大野郡の鉱山を開発したことになっている。ウバ岳(優婆岳)は或いは祖母山であり、麓の岩穴は鉱山の坑口ではなかったかと思われ、又々記録以前の木浦鉱山や尾平鉱山と関係があったのではないかと考えられる。

古代の錫

弥生時代から奈良時代にかけて製作された銅鐸・銅剣・銅鏡・仏像は青銅製であり、銅と錫の合金である。つまり古代から金・銀・銅・鉛・錫の鉱山は開発されていたのである。平成一四年八月のNHK放送で、中国のタクラマカン砂漠の楼蘭王国の跡からは今から三八〇〇年前の青銅製品及びその炉があったという。

《青銅製品の分析例》

(単位：パーセント)

	銅	錫	鉛
銅鐸 四九個	七五～九三	二～一七	一～九
銅剣・銅鉾 二〇個	三二～九五	二～六二	〇・六～一四
鏡 一二枚	五九～九四	一三～二五	二～六

※「荒神谷遺跡と青銅器」島根県古代文化センターより

錫の効果

銅に錫を添加することにより硬度を増す。八パーセント錫含有の青銅は純銅に対して硬度は二倍になる。一〇～一五パーセント錫の青銅は黄金色を呈し、祭祀・権威象徴として使われた。五〇パーセント錫含有では白色となる。

真鍮も黄銅としては古代からあった(亜鉛と銅の合金)というが、亜鉛単体としては一七世紀になってから発見されたものなので古代の利用はなかった。

錫の産地

中国では殷の時代から安陽付近に数鉱山、西南部に多数の鉱山があるが、朝鮮半島には一鉱山しかなく、沿海州とシベリアに数鉱山ある。日本は苗木・明延・生野・石見・木浦・尾平・見立・嘉納・土呂久等限られている。そしていみじくも木浦・尾平(大分県)・見立・土呂久(宮崎県)の各鉱山は何れも祖母・傾山に近い。

中国からの渡来鏡は錫品位が高く、日本の模造鏡は錫品位が低いといわれる。

佐賀県安永田遺跡からは錫鉱石、吉野ヶ里からは錫地金が出土している。

主要鉱山の発見年代

- 石見鉱山　大永六年（一五二六）
  一五三三年灰吹法により銀急増、慶長～寛永期が最盛
- 佐渡金山　天文一一年（一五四二）
- 生野銀山　〃　（　〃　）
- 尾平鉱山　天文年間（一五三二～一五五五）
- 木浦鉱山　永禄二年（一五五九）

これらの発見年代はおおむね本格的な開発が始まったと言う記録であり、そこに至るまでにはいわば幻の時代があったのではないかと思われ、その分野は考古学に委ねなければ致し方ない。

年代測定法

土器・焼け土・焼け石等の被熱したものの年代を測定する各種測定法が発達した。つまり記録に残らない遺物・遺跡の年代がわかるようになった。

一　熱ルミネッセンス法
二　残留磁気分析法
三　フィッショントラック分析法
四　炭素一四年代測定法…遺跡調査の主流

五　電子スピン共鳴法…炭素一四法に代わる
六　カリウム放射性同位法…一〇〇万年以前信頼性高い
七　絶対年代法(木材の年輪)

各種金属の融点

各種金属の製錬には炉とふいごが欠かせないものであるが、その時重要な要素はそれぞれの融点である。

金	一〇六四℃	銅	一〇八四℃
銀	九六一℃	亜鉛	四一九℃
鉛	三二七℃	錫	二三二℃

長登鉱山と奈良大仏の関係

銅と錫の合金である青銅は古代から各種機器に使用されていたが、日本最古の銅山跡山口県美祢郡の長登鉱山と奈良大仏の関係は地名の伝説が実証されたという点で重要である。即ち平成二年以降鉱山跡の谷溝から一五〇点に及ぶ木簡が発見され、その中には大神直(オオガノアタイ)とか、豊前とか神亀三年(七二六)の記事が読み取れ興味深い。また昭和六三年東大寺大仏殿の回廊より外の谷地形で発掘が行われ、八世紀半ばに大仏が鋳造されたときの鋳型の破片・銅のカス・建物の木屑や今日の伝票に当たる木簡が堆積していた。この銅のカスを分析すると山口県美祢郡長登鉱山のものであることがわかった。

ナラノボリ→ナガノボリと変化したという伝説は真実であった。

奈良大仏に関する年表と青銅に関するデーターを示してみる。

・天平一七年(七四五)　工事開始
・天平勝宝元年(七四九)　宇佐八幡神大仏参拝
・　〃　四年(七五三)　開眼供養
・　〃　九年(七五七)　大仏建立

このとき大仏は全身に鍍金されていた。

奈良大仏は高さ一四・七メートル　人類が作った最大の鋳造物

銅	四九六トン	鉛	—
錫	八・五トン	鉄	—
	九一・六〇パーセント		一・六一パーセント
	二・四六パーセント		〇・三七パーセント

・金　一二五キログラム　・水銀　二・五トン

〔備　考〕

銅は山口県長登鉱山のもの

金は宮城県涌谷町黄金山のもの

鎌倉大仏の高さ一一・三九メートル

建長四年（一一五二）鋳造開始

銅	六七・〇四パーセント	鉛	一三・〇四パーセント
錫	八・四二パーセント	鉄	〇・〇二パーセント

〔備　考〕

宋の銅銭を潰して造ったという説がある

木浦鉱山年表

・保元二年（一一五七）　発見　その後休山

・元禄二年（一五五九）　再発見「大野郡村誌」

・慶長一二年（一六〇七）　藩主中川久盛は鉛五〇〇斤（三〇〇〇キロ）を二代将軍秀忠に献上した。

・元和六年（一六二〇）　藩では銀山を開発し、木浦鉱山錫場を開設、土屋源右衛門を目付にし、住民には一日につき男五合、女三合の扶持を与えて採鉱させたという。

・享保一六年（一七三一）　山奉行が続いていることは鉱山が藩営として継続していた証拠と思える。

・享保年間（一七一六～一七三五）　河野藤大夫（代々同姓同名）は姥山に錫鉱を発見し、天狗平山には比類なき名鉱を発見、毎月八千斤の正錫を産出し、領主より「その鋪を八千斤と名付けよ」と言われた。

・宝暦の頃（一七五一～）　田近山に錫・鉛が発見され市街には数多くの遊郭ができたという。田近山が繁栄の極に達した頃は諸山の中心となり、なかでも大切銀坑は当時佐渡・但馬・石見とともに我が国四大鉱山の一つとして並び称された。慶長年間から宝暦年間にかけて木浦鉱山は最盛期であった。

・享和三年（一八〇三）　「豊後国志」ではすでに松木平・米原・姥山・茸迫・天狗平・大霧嶽・田近山等は廃坑になっており、概ね寛文（一六六一）前が盛んであったと記している。

「両郡古談」には「木浦山の盛んなころには人口十万

人程、遊女町は木浦に千軒、米原山に千軒あり」とあるが、これは誇張としても「豊国史談」にも「他より移住の民一時は木浦に千軒、米原に千軒」と記してありこの程度はいたのではあるまいか。岡藩には木浦・尾平の両鉱山があって中川氏が入部以来幕末まで支配したのであるが、木浦鉱山は木浦内村の中に鉱山が発見されて成立したので、木浦内村の小庄屋・肝煎・村横目などの役人と、鉱山町には乙名・組頭・山目代・宗旨横目等の役人が別に置かれ特異な二重の役人制となっている。木浦内村では鉱山が発見され、その発達に伴って新しく鉱山町が出来た。その木浦町は金具町・横町・梅木町・万屋町・鉛座町・仲町・上町・竹田町・長戸町・生木町・下川・森下の一二の区画に分けられていたという。

「踏み絵紀行」によると

天保一二年(一八四一)尾平鉱山と木浦鉱山の現状及び前年生産額を記載している。

	人家	人別	他から屠り場	御扶持米	錫鉱生産
尾平	三四軒	一八〇人	四五人	二五〇石	三千斤
木浦	?	二五〇人	七人	三二四石	八千斤

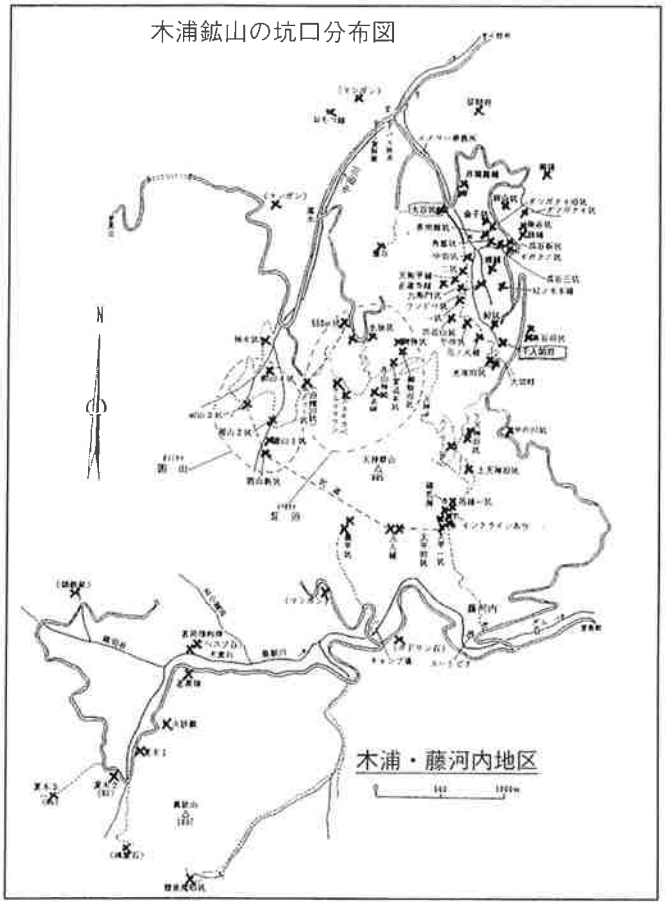
これを見ると当時は両鉱山ともかなり下火になっているものの木浦鉱山の方が少し規模が大きく、また生産効率も高かったようである。

特記すべきは文化年間の初めごろ、木浦の囲山に武平治という鋪があって武平治ひとりで一万四千斤(約八・四トン)錫代にして銀札を一年に一二〇貫(約一八〇万円か)を受け取ったと記してある。この武平治が当てた囲山は、昭和の初めごろから戦前まで東洋鉱山が盛大に稼行したところで、木浦鉱山全域から見ても有力な鉱床地帯であった。幸運にも囲山という有望な地域でよい鉱床を掘り当て、組頭・乙名・宗旨横目という役職であるとともに文化二年(一八〇五)質屋の株まで貰い受け、更にこの年名字を免ぜられ植木という姓を名乗った。いろいろな設備が四〇棟もあったということは、かなりの期間非常に繁栄した証拠で長い木浦鉱山の歴史の中では河野藤大夫・佐藤大膳と並んで最大の成功者であった。この三人を享保の中興という。

「踏絵紀行」の著者は、天保一二年(一八四一)当時三〇年間にわたって宗旨奉行を勤めると同時に郡奉行を兼

務していた井上快助という人である。

郡奉行を長く勤めたために産業に詳しく、尾平や木浦鉱山のことはかなり詳しく書いている。大切峠の北側谷の中腹九合目に千人間府というのがあって、一大規模の切貫に着手し実に七年の長期にわたる歳月を費やしてようやく目的に近くなったころ錫の鉱脈に当たり、その採掘を兼ねて毎日一〇〇〇人の坑夫を入坑させるようになった。「踏絵紀行」ではこの千人間府に大変な事故のあったことが記してある。つまり安息日にもかかわらず休まずに坑内に入り、一〇〇〇人の内一人は坑口にいてみんな出てこいと呼んでいるのに誰も出てこず、そのうちに山が崩落して九九人が潰死したという。



近代に入って

幕末から明治・大正にかけて幾度も浮沈を繰り返しながら昭和に入る。

・昭和二年（一九二七）　東洋鉱山は英国人の経営で活況を呈した。英国人はレンガ造りの家を建てて人目

を引いた。

・昭和九年(一九三四)　中島鉱山㈱鉱区を買収
・昭和一〇年(一九三五)　採鉱開始
・昭和一八年(一九四三)　囲山の東洋鉱山は戦況悪化により閉山した。しかし閉山までの操業状況は、軌道を敷きトロッコを用い五〇〇戸の坑員住宅を建て川をへだてた向こうには講和館や役員住宅が立ち並んでいたという。
因に東洋鉱山㈱は大正一五年に宮崎県見立鉱山を取得、本邦有数の錫鉱山として終戦まで稼行した。
・昭和三六年(一九六一)　新たにエメリーが発見された。
・昭和四二年(一九六七)　エメリーは、本格的に採掘され一〇人で二〇〇〇ﾄﾝ／年を採掘し現在に至っている。
・昭和四四年(一九六九)　通産省が囲山下流で試錐探査。

日本の地下資源

室町～戦国～江戸時代初期にかけて日本の主要鉱山が盛んに開発され、更に一五三三年石見銀山に朝鮮から灰吹法の技術が伝来して、日本各地で灰吹法製錬が行われるようになった。「林勝見先生遺稿」には「伊豫国住人河野弾正が木浦鉱山松木平で神の託宣により灰吹法を知り、天道吹きと名付けた」と記している。

各地で大量の銀が生産され、主に一六世紀前半では戦国大名が軍資金として使い、また海外に多量に輸出された。ヨーロッパで作られた世界地図には日本の金・銀の産出が記されておりマルコポーロの「東方見聞録」で「黄金のジパング」と呼ばれるほど世界有数の金属生産国であった。又、永禄一一年(一五六八)ヨーロッパで発行されたドラード地図には「銀鉱山王国」の記載がある程である。そして銀の安値輸出でポルトガルやオランダに莫大な富を与えてしまった。

日本においては平成一四年初頭北海道における最後の炭鉱が閉鎖され、今では一億五千万ﾄﾝを超える世界最大の石炭輸入国となった。石灰石・硅石等窯業原料は別として、僅かの金鉱山(菱刈鉱山等)のほかは金属鉱山は皆無という資源最貧国となった。金・銀・銅の産出額では恐らく世界屈指であった時代ははるか昔の夢となり、未来永劫再び資源国になることはない。

まとめ

木浦・尾平両鉱山とも藩にとっては錫・鉛の供給地であると同時に繁栄しているときはドル箱であった。また幕末になると軍需品としての需要も増した。そもそも木浦鉱山がこのように、恐らくは日本屈指の長い年月にわたって栄枯盛衰を繰り返したのは、秩父帯の南限とも言われるこの地域に石灰岩層があり、それが四万十帯の地層と接している付近で新第三紀花崗岩の貫入を受け、広範囲に石灰岩層を交代しスカルン帯が出来、あるいは剪断面や地層境界面にそって脈状をなす金属鉱物の鉱床が出来たからである。

このように広範囲の接触交代鉱床及びスカルン帯のために長い歴史時代に所を変えては散発的に富鉱体に当たり、そのために藩及び戦前戦後の鉱山経営者が容易にあきらめることの出来ない魅力を持ち続けたのである。しかし、そのことは実際に業に携わる住民にとってはむしろ悲運であった。臥薪嘗胆してやっと富鉱部に当たれば喉が渇いていたように死に物狂いで稼いだのである。栄枯盛衰は世の習いとはいえ結局好況の時期はほんのわずかで苦しい衰退の時期が大半である。木浦鉱山史を一口で言えば「哀しい」の一言である。

四〇〇年前に始まったとされる木浦の「すみつけまつり」は墨のように黒い銀鉱石がたくさん採れる事を願って始まったという説が有力である。

大切峠近くの雑木林の中に木浦女郎の墓が十数基ある。川石の一つを真ん中に立て、そのまわりに十個ばかりの川石を円形に置いたものである。寛永とか宝暦の好況の頃に多くの遊郭ができたというが、この薄幸の女性たちは不況の時期や自らの体調を崩したようなとき、いかなる思いで日を過ごしたのだろうかと思う。

直川村の歌人後藤サダ子氏の歌を二首、古藤田太氏の著書の中から借りた。

身を売られ木浦の鉱山(やま)に流れ来し
貧しき女郎ら一生(ひとよ)のあわれ

何をおもい　何たのしみて日をへしか
何も語らず女郎ら眠る